

カント哲学のコンテクストとしてのバウムガルテン 「欲求能力」論の検討

著者	檜垣 良成
著者別名	HIGAKI YOSHISHIGE
発行年	2011
その他のタイトル	An Examination of Baumgarten ' s Theory about the " Appetitive Faculty " as a Context of Kant ' s Philosophy
URL	http://hdl.handle.net/2241/115197

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520006

研究課題名（和文） カント哲学のコンテクストとしてのバウムガルテン「欲求能力」論の検討

研究課題名（英文） An Examination of Baumgarten's Theory about the "Appetitive Faculty" as a Context of Kant's Philosophy

研究代表者

檜垣 良成 (HIGAKI YOSHISHIGE)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：10289283

研究成果の概要（和文）：アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテンの『形而上学』（1739 Halle. 4.Auflage, 1757）における「欲求能力」論を検討した。その成果として、「インセンティブ」と「理由」についてのカントの理論は、バウムガルテン『形而上学』における“elater”と“motivum”についての理論との脈絡においてはじめて十分に理解されうるということが判明した。また、カントの重要概念である「純粋理性」の真価も、バウムガルテンにおける「快」と「欲求」との関係についての考え方との対比において明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：I examined Alexander Gottlieb Baumgarten's theory about the "appetitive faculty" in *Metaphysica* (1739 Halle. 4.Auflage, 1757). The result of the examination was that Kant's theory about "Triebfeder" and "Bewegungsgrund" can be understood only in the connection with Baumgarten's theory about "elater" and "motivum" in his *Metaphysica*. The true value of Kant's important concept "pure reason" was also discovered in contrast with Baumgarten's concept of the relation between "voluptas" and "appetitus".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：哲学、思想史、カント、バウムガルテン、欲求能力

1. 研究開始当初の背景

18世紀ドイツの哲学者アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテンと言え、美学の創始者として有名であり、彼の『感性論（美学）』（*Aesthetica*）を中心とした研究は相当数あるが、彼の『形而上学』は、ヴォルフ哲学の焼き直しにすぎないと見なされ、それ

自体ではあまり注目されることがなく、特に「欲求能力」論については、研究は手薄である。

研究代表者は、ヴォルフ主義哲学との対決という視点からカントの理論哲学を再検討して成果を挙げてきたが、今回は、実践哲学に関して、ヴォルフ主義の哲学者の中でも一番カントに身近であったバウムガルテンの

「欲求能力」論を検討する。このことを通して、カント哲学のコンテキストをより明瞭にするためにである。

道徳法則による意志規定の問題を解くには、「認識能力」・「快と不快の感情」・「欲求能力」の関係の解明が不可欠であるが、バウムガルテンがこの関係を論じたテキストを踏まえることによって、今なお不分明と見なされるカントの諸テキストを理解するための基盤となる手がかりが獲得されるはずである

2. 研究の目的

カントは、1755年から1796年までの41年間に及ぶ教授活動の間、終始バウムガルテンの諸著作を講義のテキストとして用いた。もちろん、この事実が直ちに、カントがバウムガルテンの思想に与していたということの意味するわけではない。しかし、カントは、みずからの講義において、これらの書から対応的に「概念」を取り上げたので、バウムガルテンの「概念規定」と「証明」は、常に彼の目の前にあったわけである。したがって、賛成するにせよ、反対するにせよ、バウムガルテンに対するコンテキストの中でカントの思想形成がなされたことは確かであり、少なくとも用語法や立論形式についての影響は必至と言わねばならない。バウムガルテンの哲学は、カント哲学の形式面を理解する上での必要不可欠な前提である。

カント自身が「形而上学がその周りを回転している二つの軸」の一つと述べている「自由概念の実在性」であるが、上のコンテキストが看過されたために、必ずしも精確に理解されてきているとは言い難い。バウムガルテンの自由論は、『形而上学』の一章を成す「経験的心理学」の「欲求能力」論において見いだされる。「経験的心理学」は、カントが自身の「形而上学」講義の入門篇として講じたものであるばかりか、彼の「人間学」講義においてもテキストとして利用された重要箇所である。

本研究では、自由論を中核とするカント批判哲学を真に理解するための準備作業として、この「経験的心理学」において「欲求能力」というものがどのように捉えられているかを跡づけてみる。そうすることによって、「認識能力」と「快と不快の感情」と「欲求能力」との基本的関係、「下級欲求能力」と「上級欲求能力」=「意志」との区別、「インセンティブ」と「理由」の規定、Wille と Willkür との関係など、カント批判哲学へと

至るコンテキストを判明にして、カント実践哲学の特異性をより精確に明らかにする。

3. 研究の方法

(1)アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten) の『形而上学』 (*Metaphysica*, Halle 1739. 2.Auflage, 1743. 3.Auflage, 1750. 4.Auflage, 1757 (In: *Kant's gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften Bd. XVII). 5.Auflage, 1763. 6.Auflage, 1768. 7.Auflage, 1779 (Reprint: Hildesheim 1973).) 第3部「心理学」の「経験的心理学」 (*Psychologia Empirica*) の中の「欲求能力」 (*facultas appetitiva*) についてのテキスト (§.651–732) を検討する

(2)以上のテキストを検討するにあたっては、バウムガルテンの弟子のゲオルグ・フリードリッヒ・マイアー (Georg Friedrich Meier) が1766年に出版し、カントの『純粹理性の批判』出版直後の1783年にはヨハン・アウグスト・エーベルハルト (Johann August Eberhard) が注釈を付けて復刻した独訳版『バウムガルテンの形而上学』 (*Alexander Gottlieb Baumgartens Metaphysik*, Neue vermehrte Auflage, Halle 1783) と、これに先だって1755年から1759年にかけて出版されたマイアー自身の手になる4巻本で1800頁を越す大著『形而上学』 (*Metaphysik*, Halle 1755-1759) のマイクロ・フィルム資料等を参考にして、正確な理解になるように努める。

(3)また、カント全集のテキストデータベースを用いて、バウムガルテンの各概念に対応するカントのテキストを抽出して整理し、比較対照する。

4. 研究成果

(1)バウムガルテン『形而上学』第3部「心理学」の「経験的心理学」に従って、まず「経験的心理学」の概念を明らかにした後、第14節以降の「欲求能力」論の訳注を作成した。第14節「どうしてもよさと気に入りについて」、第15節「快と不快について」、第16節「欲求能力一般について」、第17節「下級欲求能力について」と続く。その際、「情動」(*Affekt*) と「欲動」(*Leidenschaft*) との区別などについて、カントとの異同を明らかにした。

(2)„Triebfeder“という概念のカントの使用は二義的であるように見える。一面において、

その概念は、仮言的命法を規定するだけの、いわば「欲求の端的によいわけではない根拠」を意味する (Vgl. IV 427f.)。他面において、**Triebfeder** のもとで、それに基づいてはじめて端的に (すなわち、道徳的に) よい意志が規定されるところの根拠が理解される (Vgl. V 71f.)。

バウムガルテンにおいて **Bewegursache** は、「感性的な **Bewegursache**」としての **Antrieb** と、「理性的な **Bewegursache**」としての **Bewegungsgrund** とに区分される。カントは、この区分を否定しない。しかし、彼の場合、今や「主観的に強要する **Bewegursache**」としての **Antrieb** と「客観的に強要する **Bewegursache**」としての **Bewegungsgrund** との対比が前面に出てくる。彼は、「主観的」と「客観的」という二者択一的対比を強調することによって、「感性的な **Triebfeder**」からの「理性的な **Bewegungsgrund**」の純化をもくろんでいる。**Triebfeder** は「主観的」であるが故に、「**Triebfeder**」と呼ばれうるのは、カントにおいては「感性的な **Triebfeder**」だけである。

「判定」の視点からは、カントは **Triebfeder** の「主観性」を消極的と見なす。というのは、「端的によいもの」は、いかなる主観的な根拠にも基づきえないからである。これに反して、「尊敬の感情」を惹き起こす **Triebfeder** としての「道徳法則」は積極的に評価される。なぜなら、それは「執行の主観的原理」と見なされうるからである。

(2)1770年代のものと言われるカントの「一般実践哲学講義」では、まだ仮言的命法も一つの **Bewegungsgrund** であった。これに反して1785年の『道徳形而上学の基礎づけ』では、仮言的命法は一つの **Triebfeder** だけしかなく、定言的命法だけが **Bewegungsgrund** である。このような変化はいかにして成立したのか。

道徳的意志規定の執行のために何らかの感情が道徳法則とは別のところに要求されるなら (たとえその感情が神や希望される世界に対するものであったとしても)、定言的命法の強要ですら **pathologisch** であることになってしまいうだろう。その場合、その定言的命法は、仮言的命法と同様に、煎じ詰めれば **Antrieb** と見なされうるであろう。だから「一般実践哲学講義」では (『純粹理性の批判』でも)、「定言的命法」は「仮言的命法」から種的に区別されえなかった。「命法」一般すなわち「命法としての **Antrieb**」を、「命法の形をとらない **Antrieb**」との対比におい

てしか、「実践的」原理と見なすことができなかつたのである。この点においては当時のカントは、意志規定の執行が快を前提するというバウムガルテン流の欲求能力論をまだ完全には脱していなかつたと言わざるをえない。

しかし、「道徳法則」に対する「尊敬の感情」が見いだされることによって、なるほど定言的命法は主観においてまさに **Antrieb** であるかのように強要するけれども、決して **Antrieb** そのものではないと言えるようになる。だから、その定言的命法は、**Antrieb** としての仮言的命法から種的に区別され、厳密に言えば、それのみが唯一の真なる **Bewegungsgrund** になるのである。

(3)カント以前の近世哲学は「理性主義」と「経験主義」とに区分されるのを常とするが、両者の相違は「認識の源泉を理性に求めるか、それとも経験に求めるか」と説明されるだけでは十分には明らかでない。「理性主義」も「経験」に基づいて認識することを認めるし、「経験主義」でも「理性」によって認識 (推理) がなされるからである。むしろ、あらゆる「実在的」な認識が元々は「経験」を源泉とするかどうか。もしくは、純粹に「理性的」な認識が「実在性」をもちうるかどうかの問題である (ア・プリオリな認識の可能性の問題)。

デカルトは「観念論」の展開を準備した最重要人物の一人であるが、同時に彼が「純粹理性」による「実在的」認識を認めていたということは、「明晰判明の規則」を「オントローギッシュな神の証明」へ適用するにあたっての **revera** という語に注目すれば明らかである。このような「実在性」理解は、ライプニッツを経てヴォルフやエーベルハルトといったドイツ理性主義の哲学者たちに継承されたが、その中でも特にカントに身近であったのはバウムガルテンである。

批判期のカントがなし遂げたことは、なるほど一面では、この理性主義に対する批判である。突き詰めて言えば「論理的な無矛盾性」をもって「実在性」とするような立場からの決別である (分析的判断とア・プリオリな総合的判断との峻別)。しかし、その決別は、何十年にもわたる理性主義徹底改善の試みが極限に至ったが故の飛躍とも言うべきものであるし、見方を変えれば、真に「純粹な理性」による真に「実在的な認識」(「抽象的」認識ではない)の確立という点では、新たな理性主義の提案でもある。

この新たな理性主義は、実践哲学の分野に

も及び、「上級欲求能力」の純粹性（バウムガルテンのように「理性を介する」すべての欲求能力が上級と言えるのではなく、「純粹意志」のみが真の上級欲求能力である）(Vgl. V 22ff.) や、「実践」概念の純粹性（バウムガルテン流の「技巧的－実践的」とは區別された「道徳的－実践的」の発見）(Vgl. V 172, XX 196ff.) をももたらすことになる。

このようにして前批判期の理性主義思想から批判期の実践的－ドグマ的形而上学に至るカント哲学に一貫して見いだされる「純粹理性」追求の試みを総括した。

(4) 従来、カントの「実践的自由」の概念には「自律の自由」と「選択の自由」という重ね合わせがたい両義性があると考えられてきたが、バウムガルテン『形而上学』における「ヴィルキューア」(Willkür) と「意志」の概念を踏まえることによって、このような理解には語弊があることを明らかにできる見通しを得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1. 檜垣良成、カント実践哲学における「判定」原理と「執行」原理の区別のゆくえ——理性の事実と尊敬の感情——、『カントと日本の哲学』(日本カント研究 12, 日本カント協会編、理想社)、査読有、2011年、159—176頁
2. 檜垣良成、バウムガルテンの欲求能力論——カント哲学のコンテクストとしての——、『哲学・思想論集』(筑波大学人文社会科学部研究科哲学・思想専攻)、査読無、第36号、2011年、71—87頁
3. 檜垣良成、Reinheit des Bewegungsgrundes bei Kant, 『哲学・思想論集』(筑波大学人文社会科学部研究科哲学・思想専攻)、査読無、第35号、2010年、123—128頁
4. 檜垣良成、純粹理性と実在性の問題—カントと理性主義—、『カントと人権の問題』(日本カント研究 10, 日本カント協会編、理想社)、査読有、2009年、59—75頁
5. 檜垣良成、Triebfeder bei Baumgarten und Kant, 『筑波哲学』、査読有、第17号、2009年、94—101頁

[学会発表] (計3件)

1. 檜垣良成、Willkürの自由をめぐるテキストの検討——バウムガルテン『形而上学』からカント『道徳形而上学』まで、カント研究会第246回、2010年10月31日、法政大学92年館
2. 檜垣良成、純粹理性と実在性の問題(共同討議「カントと実在論」提題)、日本カント協会第33回学会、2008年11月15日、九州大学文学部
3. 檜垣良成、カント実践哲学の転回と動機概念、カント研究会第224回例会、2008年8月31日、法政大学92年館
6. 研究組織
(1) 研究代表者
檜垣 良成 (HIGAKI YOSHISHIGE)
筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授
研究者番号：10289283